

Reitaku Association for Overseas Development

麗澤海外開発協会 会報

平成16年
(2004年)
12月1日
第3号

第2巻 第2号
年2回発行

主な記事

巻頭言 挨拶(岩田啓成)
インタビュー 竹原茂氏に聞く
レポート 私のネパール紀行(岩本仁)
エッセイ・寄付金等の報告

発行所: 財団法人麗澤海外開発協会
〒277-0065 千葉県柏市光ヶ丘2-1-1
TEL.04-7173-3165 FAX.04-7173-8953
<http://www.reitaku.or.jp>
発行人・岩田啓成 / 編集人・横山守男

心の通う国際協力を推進する

財団法人麗澤海外開発協会 副会長 岩田 啓成



麗澤海外開発協会は、昭和46年(1971年)に外務省所管の公益法人として創設されて以来、発展途上国における文化・経済の発展に資する人材の育成と技術指導を推進し、現在は主にネパールにおける鍼灸専門家の育成および無料

巡回治療を実施する事業への助成、タイ北部での少数民族の子供たちの生活・教育施設の運営(メーコック財団)等への助成を推進しております。

昨年からは、麗澤大学教授で当協会理事の竹原茂氏(旧名: ウドム・ラタナヴォン 出身国: ラオス)を发起人とした「竹原基金」を設け、東南アジア諸国で貧困等の理由で学校へ行けない多くの子供たちのための教育助成事業も推進しています。また、当協会へのご入会ならびに竹原基金へのご協力等に対しては、皆様方に多大のご協力をいただいております。紙上をお借りして厚く御礼を申し上げます。

そして今年度に入り、皆様からの会費および寄付金等を有効に活用していくための「調査委員会」を発足させ、より積極的に心の通う国際協力活動をめざして、これからの国際協力・支援のあり方についての調査・検討を進めております。

モラロジーの創建者である法学博士・廣池千九郎は、世界人類の安心・平和・幸福の実現をめざしてモラロジーを創建し、モラロジー研究所ならびに廣池学

タイ ▶
メーコック財団

子供たちにカルタ遊びを通して日本語を教える



◀ ネパール
ティテパティよもぎの会
9月に鍼灸クリニック兼もぐさ工場がオープン

園を創設されました。麗澤海外開発協会も、全世界に向かって精神的改革を呼びかけた廣池千九郎の遺志を継いで創設されたものであり、今日まで世界平和をめざした国際協力を努力しております。

今日、深刻な政治的・経済的諸問題と取り組む発展途上国の姿を見ると、先進各国との経済格差はますます広がってきております。それらの諸国に対して援助の手を差し伸べることは、今日の経済的繁栄を享受している私どもの果たすべき役割ともいえます。麗澤海外開発協会では、これまでの経験と実績を踏まえ、廣池幹堂会長のもと、発展途上国を中心とする心の通う国際協力・支援活動のいっそうの推進に向けて努力してまいります。そのためには、皆様方のご支援とご協力が必要不可欠です。今後とも、会員へのご入会ならびに竹原基金へのご協力等、当協会の諸事業に対するご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

自らの苦難の半生を綴った著書
『ラオス・日本、アジアに生きる』を出版!

麗澤大学教授・麗澤海外開発協会理事
竹原 茂 氏に聞く

異文化理解と国際協力に生きる

麗澤大学教授・麗澤海外開発協会理事の竹原茂(旧名ウドム・ラタナヴォン)氏が、今年11月に麗澤大学出版会から自著『ラオス・日本、アジアに生きる 異文化理解と国際協力の理想を求めて』を出版。本書には、竹原氏の苦難の半生と、麗澤大学・モラロジー研究所との出会い、麗澤海外開発協会との関わり、そして、長年にわたって情熱を注がれている難民救済運動や国際ボランティア活動などがいきいきと描かれています。

そこで、本書に込められた思いとともに、ご自身の半生、現在の活動等についてあらためてお聞きしました。(聞き手=本紙)

本書の表題「ラオス・日本、アジアに生きる 異文化理解と国際協力の理想を求めて」に込められた思いについてお話しください。



(撮影=武澤保美)

竹原 1943年、当時のラオス王国で生まれた私は、非常に貧しい生活の中、中学・高校には政府から奨学金をもらいながら勉強しました。そして65年に国費留学生として来日し、一橋大学等で学んでいたのですが、75年にラオスで起こった政変によって共産党政権が樹立し、帰国を断念せざるをえなくなり、政治難民として日本に亡命しました。その厳しい境遇の中

で、廣池千太郎先生(モラロジー研究所第3代所長・麗澤海外開発協会初代会長)や廣池幹堂先生(現理事長・会長)等との出会いによって麗澤海外開発協会や麗澤大学での役割を頂き、今日までラオス・アジア、そして日本を通して難民救済運動や国際ボランティア活動に努めてきました。本書によって、自身の半生や国際協力への取り組み・思い等について率直に伝えたかったのです。

ぜひ多くの方々に本書お読みいただきたいものです。ところで、麗澤海外開発協会関係の活動には、協会の開設前から関わっておられますね。

竹原 そうです。麗澤海外開発協会は、1971年に外務省所管の公益法人として認可・設立されましたが、その発足の契機となった最初の事業は、ラオス王国における養蚕や野菜の栽培、鯉などの養殖事業でした。そして67年に、その農地の所有者でピエンチャン商工会議所会頭のカン

バイ・ピラパンデ氏が来日し、廣池千太郎先生との対談が行われたとき、一橋大学の学生だった私が通訳を担当したのです。それからは協会スタッフへのラオス語の指導などに協力するため、毎月のように廣池学園を訪れるようになり、71年からは協会の囑託としてお世話になりました。

その後はラオスに帰国されていますね。

竹原 協会が、ラオス王国のフムパン・サイヤーシット経済計画大臣をお招きしたとき、大臣から「ラオスの経済再建のためにも、ぜひ戻ってきてほしい」と言われました。廣池先生や協会役員の皆さんからも励ましを頂き、72年に私は妻と子どもを連れてラオスに帰国し、翌年、経済計画省の計画課長として入省しました。

ところが、私が帰国したころから、王制で自由主義国の母国に共産党勢力が徐々に台頭してきて、私の存在が受け入れられなくなり、身の危険をも感じるようになってきました。この状態では日本人の妻や子どもと暮らしていけないと判断した私は、再び日本への留学を決意し、一橋大学大学院に入学しました。そして75年にラオスが共産主義国となったため、私は帰国を断念し、「難民」として日本に亡命したわけです。

難民という厳しい立場で、みずから先頭に立って難民救済運動、国際ボランティア運動に尽力されますが、その精神的なバックボーンとなったものは?

竹原 祖国に帰れずに日本で不法残留となったラオス人を支援する活動を進め、さらに「難民を助ける会」「アジア連帯委員会」等を立ち上げ、難民救済運動、国際ボランティア活動の輪を広げていきました。その支えとなったものは、ラオスに対する祖国愛とラオス人としての誇り、そしてアジア人としての強い自覚でした。何よりも、難民の一人だった私の身元保証人となってくださった亡き廣池千太郎先生の温かいご厚意を忘れることができません。先生のおかげで現在の私があるわけで、感謝してもしきれないほどです。

私は一橋大学大学院を卒業後、麗澤大学に採用され、モラロジーを学ぶようになりました。その教えに共感した私は、モラロジー研究所の皆さんにも協力をお願いし、それが「モラロジー国際救援運動推進委員会(MIRC)」の活動となりました。今、経済的な国際協力だけでなく、精神的な面での国際理解も必要だと痛感しています。

現在は少数民族の救援活動にも尽力されていますね。

竹原 少数民族は難民と同じような扱いを受けています。そこで、タイ北部で恵まれない少数民族の救援活動等を行うメーコック財団(メーコック・ファーム)への支援を行っています。

私は、このような国際ボランティア活動は、単なる経済的な支援だけでなく、常に「教育」という視点に立って進めることが重要だと思います。今、麗澤大学で国際協力論やタイ語、東南アジアの社会と文化を教えています。その一方で、私の経験を学生たちに話し、「難民とは何か」「貧困とは何か」「少数民族とは何か」を共に考え、本当の意味の国際協力を教えたいのです。そのためには実際に見聞きしなければ、その悩みや苦しみはわかりませんから、学生を連れてタイ少数民族の生活を視察し、ボランティアを体験する「タイ・スタディツアー」を、88年から毎年実施しています。また、麗澤大学の学生は「プアン」(タイ語で「仲間」の意)というサークルを結成し、現地に足を運び、国際理解や国際協力を肌で体験する国際協力活動を積極的に行っています。

そして麗澤海外開発協会に「竹原基金」が設けられました。

竹原 東南アジアには、小学校を卒業しても、貧しいために中学校へ進学できない子どもたちが大勢います。こうした現状を、廣池幹堂先生をはじめ協会の皆さんがご理解くださり、昨年から「竹原基金」がスタートしました。この基金の目的は、タイやラオス、カンボジアなど東南アジアの貧しい子どもたちや少数民族の子どもたちの教育等を支援することにあります。そして、私はこの「竹原基金」が協会の国際協力活動のさらなる発展につながることを期待しています。ぜひとも多くの方々からのご支援を、心からお願いしたいと思います。

< 注目の最新刊 >

竹原 茂著『ラオス・日本、アジアに生きる』

祖国ラオスから2回の日本留学、そして亡命・帰化。難民初の大学教授を務めながら、「アジア人の視点」から国際ボランティア活動、難民救済運動等に取り組む活動とビジョンをいきいきと描く。

四六判・上製・248頁・定価1,995円(税込)

発行：麗澤大学出版会

TEL.04-7173-3331

FAX.04-7173-3154



タイ現地レポート

異文化の中で働く難しさ

渡辺 朋子 (麗澤大学卒業)



メーコック財団(MKF)で4か月間の滞在後、同じチェンライ県にあるラチャパット・チェンライ大学にて念願の日本語教師の職を得た。今年の4月からはここで日本語を教えながら、週末などにMKFに行き、お手伝いをさせてもらっている。

MKFでは主に山岳少数民族の子どもの教育支援をしているが、タイにいて気付いたことがある。それはタイに住む山岳少数民族に対するタイ人と日本人の抱く感情の違いとでもいうか、タイの山岳少数民族について日本では貧しく恵まれないということばかりが強調されがちだが、タイ人からすれば彼らは麻薬や環境など様々な問題を運んできた人たち、とも見える。タイ人でも教育環境に恵まれない子どもや経済的に豊かとは言えない人たちはたくさんいる。その中で外国人である自分などが山岳民族の問題に関わるということはどういうことか、と感じさせられた。

この半年は日本語を教えるということ以外にも、タイ社会という、言葉が半分通じない異文化の中で働く難しさのほうで自分にとっては大きいように感じる。嫌でも今までの自分の固定概念に気付かされたり、ここでのやり方に疑問を感じたり、おかしいと思ってみても、ここはタイ。受け入れられないなら、いる資格も意味もない...結局はある環境の中で自分にどれだけできるかが全て。しかし、これは日本にいてもどこにいても同じことなのだろう。ただ、自分はここでは少数派であり、この環境の中でここに合わせていくことでタイ人の考え方への理解につながり、そして自分をも生かしてくれることになっていると思っている。そしてそれが自分のキャパシティーを広げてくれる、と。

自分が教えている学生も、MKFの子どもたちも、すぐに結果は出ない。学生は来年、再来年とどれくらい日本語を習得できるか、そしてMKFの子どもたちはこれから5年後、10年後に彼らと彼らの家族、村がどう歩いていくのか...すぐにはわからない。でも、そんな彼らと共に、自分自身もこのチェンライで成長していけたらと思う。

竹原基金のご案内

竹原基金は、タイやラオス、カンボジアなど東南アジアの貧しい子供たちや少数民族の子どもたちの教育等を支援するために活用されます。何卒ご支援とご協力をお願い申し上げます。

お振込先について

* 郵便局振替の場合は、通信欄に「竹原基金」とご記入ください。

郵便振替：口座番号 00120-6-499164 名義：(財)麗澤海外開発協会

* 銀行振込の場合は、下記の専用口座をご利用ください。

銀行口座：東京三菱銀行 松戸支店 普通 1286464 名義：竹原基金口

私のネパール紀行

岩本 仁

今年の4月に、ティテパティよもぎの会の鍼灸クリニック兼もぐさ工場竣工式典のためネパールへ訪れた岩本仁さん。

岩本さんにネパールでの出会い、そして国際ボランティアに対する思いを語っていただいた。



空は頭上の遙か彼方に横たわり、風は低く街を包み込む。水はヒマラヤの山々から駆け下り、大地は行き交う人々を載せたまま、ゆっくりと時の流れ

の中を進んで行く。

1 993年、このネパールの地に日本人女性(畑美奈栄氏)が鍼灸学校を設立した。

ネパールはインドの北東部と中国のチベット(中国自治区)との間に挟まれた、東西900km、南北150kmくらいの小さな国である。インドとユーラシア大陸とは、一億年以上前は海を挟んだ別々の大陸であり、地殻運動が両大陸間の海を押し上げ、2500万年から1000万年前に陸地のぶつかった所が隆起して、ヒマラヤ山脈が生まれた。

一のような大自然の驚異と同様、ネパールの歴史は常にインドと中国、両大国の狭間にある小国としての宿命的なものであったという。この地にはネワール人(Newari)が先住していたと言われているが、4世紀にリッチャヴィ王朝が成立、15世紀にマッラ王朝の3つの王国がカトマンДУ、バクタプル、パタンを首都としてネワール文化を開き、現代に残る王宮や伝統工芸は、その時代からのものであると聞く。一方、1769年にイスラム勢力に押し出されたインド人が、この地にゴルカ王朝を建て、それ以降現在のギャネンドラ国王まで受け継がれているが、19世紀初頭にはインドを起点としたイギリス軍が中国(清朝)を目指して北上、ゲリラ戦を展開したネパール軍は激戦の末、国境線を縮小させられたものの、植民地を免れた歴史がある。その後イギリスとの関係を深めて、第二次大戦から現在もなお「グルカ兵」という名称でイギリス軍の派兵に同行し、その兵士達からの送金が重要な外貨収入源にもなっている。

つまり北はヒマラヤ、南はインドに開けた小さな盆地ではあるが、国民の大部分が農業を営んでいることから、食糧はほぼ自給、但し工業製品のほとんどがインドとの不平等関係の上での輸入であって、日用品も中国製が出回っていることから、いわゆる「インド商人」と「華僑」の狭間にたった、経済的自立のし難い国際関係の中にある国と言ってよい。



そんなネパールの地で、この度、先の日本人女性がもぐさの自国生産のための工場を設立した。もちろん、日本国

内での支援団体が生まれ、資金を集めた上でのボランティア活動である。また、ネパール各地でキャンプを開き、他の日本国内からのボランティアも参加して延べ10万人にも上るネパール人達の治療を行った功績も大きい。

日本と違い、健康保険というものが根本的に存在しないネパールの場合、病院での実費診療を受けられるのは、一部の資産家と在住外国人だけのようだ。



このような状況からか、キャンプを訪れる患者の多くは「鍼は痛いから...」とか「灸は熱いから...」というような日本人的な我がままな感情はなく、「治してくれる治療であれば、鍼灸であろうと、いかなる治療であろうと構わない」という感覚らしい。

一のような事情の中で、今回初めて私がネパールを訪れたのは、二つの目的があった。一つは大阪在住の私の恩師が幾度かネパールへ赴き、学生達への鍼灸の技術指導を行っていただけでなく、逆にネパールからの留学生を自宅へ滞在させ、鍼灸を根本的に教え込む...という経緯に対して、恩師がそれだけの情熱を燃やし続けられる行為と、その対象のネパール人達の人間的な魅力にふれてみたかったこと。そしてもう一つは、ネパールだけでなく、自分自身の中での海外支援活動やボランティアというものは是非を確認したかったことにある。

世界史を見る限り、これまで文化も経済も高所から低所へ流れて来た。今後もその傾向は変わらぬままであるに違いない。植民地時代の終わった現代、先進国は発展途上国への援助と引き換えに、新たなビジネスを産み、そして発展途上国の旧体制は好むと好まざるとに関わらず、どんどん先進国に呑みこまれて行く。例えば東洋医学という一種の文化の衰退を振り返ってみても、また、それ以上にその文化自体を培ってきた日本国民そのものの、東洋文化を受け入れる器の消失を眺めてみても、いかに一度失われたものが再生し難いかは、一目瞭然であろう。この是非を簡単に計れる尺度があるはずがない。

病める人がいて、治せる人がいれば、金銭の授受に関係なく治療を行うのが医療の原点である。しかし、その治療者の生活を保障しようとするれば、何がしかの資金調達が必要であり、その形態は病院であり、会社であり、支援団体であろうとも、その組織とそれを運営する人材や経費を含めた更なる資金が要る。そして効率よく移動したり、多人数で治療を行うというような、組織が大きくなれ

ばなるほど、更には現地での人材育成を含めた継続性のある形態に組織を作り上げようとするほど、より高額な資金と政治力が必要になってくる。好むと好まざるに関わらず、必然的に新たな産業と利権が生まれてしまうのだ。

— んな当たり前な世界的状況の中で、せめて是非を
 〽 問えるポイントは、現地の方達はどう思っており、どうしたいと考えているのかだと思う。もちろん古代のバラモン教からヒンドゥー教へと続くカースト制の中で、チベット仏教徒も含めたネパール人達の考えが一つにまとまるはずがない。しかし、こと医療に関する限りは、前述した通り「治してくれるのであれば方法は何でも構わない」という患者に対して、「本当に治せるかどうか?」の技術の有無でしかないと思える。つまり支援という名の、たとえ無償のボランティアであっても、治せば支援であり、治せなければ、ただのお節介でしかなくなってしまうのではなかろうか。

そ んなことを考えていた最中、首都カトマンズの街中で、本当に偶然ながら一人の鍼灸師志望の青年と出会った。彼が言うには、「人間に最も相応しい医療は鍼灸だと思っている。ネパール国内では、そのジュニアクラス(2年制)しかないの、私はスリランカのマスターズコース(5年制)で現在勉強している。あと8か月後に卒業なので、次は本場の日本で更なる勉強と資格を身に付けたい」と語っていた。雑談から進んで、鍼灸の内容における話題が白熱してくると、とても4年間の就学とは思えない程の実力者であり、しかも彼の知るよしもない私のオリジナルな考え方を、私の下手な英語で喋っただけで、すぐに理解し得る頭脳の持ち主であった。私の受けた感覚としては、もう既に日本の鍼灸学生のレベルではない、という印象であるが、



「全く日本語が通じないのでは日本国内での就学は難しい」と話すと、「それでは次の週にスリランカに戻るので、早速日本語学習に取り掛かる」とのこと

あった。正直、その意気込みとレベルの高さに、カルチャーショックを覚えさせられている。この青年以外にも、今回私が接触したネパール人達は、



実に純粋でフレンドリーな心の持ち主ばかりであった。

支 援という言葉の含みは、私には判らない。しかし、もしそれを、高所から低所への視点で「してあげたい」とか「してやった」と思っている日本人がいたら、とんでもない傲慢であり、自己本位である、私は思っている。「友」であるからこそ手を差し伸べられるのであり、「情」があるからこそ自分も磨かれ、そして何よりも楽しめるのではなかろうか。

— の旅行中、私にも何人かの「友」が誕生した。もちろん肌の色も言葉も風習も異なっている。しかし彼らは、二度と会えるかどうか判らない状況の中で、まず私の滞在期間中に「友」としてのスタイルを貫き通した。私も今後の交流の中で、このような関係が続くことを願っている。以前にも、また帰国後も、恩師とはこのような話題を交えさせてもらったことはないが、今回同行出来なかった恩師の思いを、少しだけ垣間見ることができたような気がする。また私の意思の中での「支援」も「ボランティア」も明確に出来たことに、今回のネパール旅行は大きな意義を持てたと思う。

彼らの経済力では、日本人ほど自由に海外へ飛び出せない。そのことから、私は旅行前に、彼らが支援や鍼灸に関する知識にしても、いわゆる「井の中の蛙」になっているのではないかと思い描いていた。しかし彼らと出会って、そんな私の先入観は吹き飛ばされた。横道にそれるが、(莊子:秋水)の中の、この句の続きを考えた者がいる。「井の中の蛙大海を知らず...されど空の青さ(深さ)を知る」。まさに彼らは自分達の頭上に広がる空の青さを知っていた。

(広島県東広島市在住)

NGOティテパティよもぎの会 ネパール手工芸品を販売

モラロジー研究所主催の「生涯学習フェスタ2004」に参加

ネパールで活動しているNGOティテパティよもぎの会がこのほど、10月2日(日)に行われたモラロジー研究所主催の「生涯学習フェスタ2004」でネパール手工芸品店を出店いたしました。手工芸品のほかに、よもぎの会オリジナル商品の「よもぎ石鹸」や「よもぎオイル」「草木染スカーフ」が毎年大変ご好評をいただいております。

千葉県柏市にある「れいたくキャンパスプラザ」では、随時ネパール手工芸品の販売を行っております。オリジナル商品のことやよもぎの会の活動については専用ホームページに載っていますので、どうぞご覧ください。 <http://www.yomoginokai.jp>



▲ 約3,000人が来場

連載コラム

ネパール祈禱師との夜

第1回

「今晚、祈禱師(ボンボ)が来て騒がしくなるけれど、気にしないで休んでくださいね」。ネパールの東北部、チベット国境に近い友人のTさん宅に逗留していた時のことである。長男の妻Bさんが病気になる(躁鬱病のような状態らしい)、祈禱師はその治療のために来るのである。怖いもの見たさもあって「私も一緒にいいですか」と申し出た私に、Tさんは迷惑そうなおそぶりも見せず承してくれた。

ネパールの山間部では、病気に罹ると、祈禱師をお願いするのが一般的である。町にあるヘルスポスト(保健婦の常駐する診療所)に行くには、山を

いくつも越えなければならない。大都市の病院に行くことなどはごく稀である。

夜がやってきた。日本には見られない漆黒の闇だ。Tさんの家族と私は綺麗に掃き清められた赤土の土間に向かい合って座った。赤々と薪が燃えている竈(かまど)の前にはBさんが座っている。家族の顔に赤い炎と影のコントラストが揺らめいて、幻想的な世界に入りこんだようだった。

祈禱が始まった。祈禱師は、日本の神官が持つ大幣(おおぬさ)のようなものを持ち、何やら言葉を発しながら、両足を揃えてぴょんぴょん跳ねる。

祈禱師の後を患者のBさんが同じように付き随う。跳躍に合わせてシャンシャンという音が大きく鳴る。それに太鼓の音が同調する。シャンシャンシャン、ドンドンドン。家族は太鼓や鈴をならしたり、両手を合わせたりして、一心に祈りつづける。単調な踊りとリズムが明け方まで続いた。家族の神聖な共同作業は、すべての場面において分業化されている現代の日本が忘れ去った風景を見るようで、私にはとても新鮮に感じられ、羨ましくさえ思えた。

この祈禱の効果があったのか、その後Bさんはすっかり快癒したそうである。(A.K)

麗澤海外開発協会のホームページ開設

http://www.reitaku.or.jp

皆様に活動を広く知ってもらうため、ホームページを開設いたしました。当協会の事業活動や30年間の歩みを掲載しております。今後モイベント情報や現地の様子など、最新の情報を掲載してまいりますので、どうぞご覧ください。



たくさんのご支援、ありがとうございます

(平成16年6月から平成16年10月末日)

昨年5月から会員へのご入会ならびに竹原基金へのご協力等をお願いしましたところ、皆様から多大のご協力をいただきました。紙上を借りて厚く御礼申し上げます。お寄せいただいた会費や基金・寄付金は、東南アジア諸国で貧困等の理由で学校へ行けない子供たちに対する教育助成事業、ネパールにおける鍼灸専門家の育成と無料巡回治療を実施する事業等に役立たせていただきます。今後とも、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

種類	年額
個人会費	1口 1万円(1口以上)
法人会費	1口 1万円(3口以上)
一般寄付金	任意の寄付金を募ります
竹原基金	任意の寄付金を募ります

郵便振替：口座番号 00120-6-499164
名義(財)麗澤海外開発協会
通信欄にご寄付の種類をご記入ください。
銀行口座：東京三菱銀行松戸支店 普通4057567
名義(財)麗澤海外開発協会

- 個人会費** 長谷篤治、平戸幹四郎、甲良昭彦、星野恵昭、嶋田順子、宮脇常夫、永井四郎、野村隆紹、金子武正、小松務、荒木利郎、高松洸、新井秀啓、今井収、山田雅雄、原田忠、田中駿平、高松昭英、重岡タミ子、西村マサノ、佐藤安彦、長谷和治、大河原良雄、中村修一、齋藤芳男、山本浩、永田善幸、小澤晴夫、渡辺康博、竹原茂、松川邦和、山本祥子、松本義一、小野剛、福澤清治、木野村教眞、望月雄二、望月靖子、土谷和光、白木ふさ子、松本哲洋、林正勝、齋藤久子、木下廣太郎、関哲夫、宮島達郎、山本幾雄、小西直之、岡戸絵美、堀部房男、藤村薫
- 法人会費** 徳山モラロジー事務所(原田忠)、佐藤薬品工業株式会社(佐藤又一)、海部津島モラロジー事務所(佐野富彦)、大垣モラロジー事務所(古川定邑)
- 一般寄付金** 長谷篤治、青木匠、久万雅寿、森下健、甲良昭彦、阿部邦夫、齋藤久子、大山寿々枝、島村弘子、金子武正、小松務、高松洸、金子幸子、琴谷達郎、原田忠、田中駿平、山田莊一、發坂卓雄、藤村陽子、長谷和治、三浦俊夫、高橋博美、山本浩、小野光江、榑崎忠彦、園部貞雄、ウヰマツマツ子、松本義一、小野剛、山添雅道、飯島孝夫、加藤栄一郎、松本哲洋、木下廣太郎、関哲夫、山本幾雄、小西直之、長谷川武、阿波モラロジー事務所(正木文男)、株式会社アイディ(伊藤一郎)、日本橋モラロジー事務所(井上照悟)、岐阜西モラロジー事務所(所一彌)
- 竹原基金** 廣池幹堂、長谷篤治、甲良昭彦、宮脇常夫、永井四郎、齋藤久子、野村隆紹、金子武正、小松務、荒木利郎、高松洸、今井収、山田雅雄、大山圭子、安達俊子、鈴木幸造、原田忠、田中駿平、高松宇佐雄、西村マサノ、長谷和治、平英幸、平百絵、中村修一、鋤柄勲治、井上千多枝、山本浩、安達俊子、加藤信次、竹原茂、阿部栄次、松川邦和、ウヰマツマツ子、松本義一、小野剛、柏谷康博、飯島孝夫、望月雄二、土谷和光、加藤栄一郎、松本哲洋、木下廣太郎、関哲夫、柏谷康博、山本幾雄、日本橋モラロジー事務所(井上照悟)、東京北モラロジー事務所レインボー会

(敬称略)